

8月ジャーナリズム

終戦から七十八年目の八月。広島の平和教材から漫画「はだしのゲン」が削除された件などもあり、今年は平和教育の観点からのメディア報道が多い印象がある。

私は一九六九年の生まれ。祖父母は戦争を体験しており、父親は集団疎開の経験がある。小学校五年生までは祖父母とも一緒に生活していた。とはいえ子供の頃、頻繁に戦争の話聞いたかといえ、そんなことはなかった。しかし、戦争を体験した人と共に生活すると、直接話を聞かなくても、日々の暮らしや何げない言葉の端に「戦争の感触」が入り込むのである。

思い出すのは新聞のチラシである。祖父母は必ず、裏の白いチラシはメモ帳に、裏に印刷のあるものはゴミを捨てる入れ物にしていた。この行為は戦争だけが理由ではないかもしれない。しかしそれは戦争において物不足を体験した祖父母が、ごく自然に行ってしまう生活のあり方でもあった。私は祖父母のこうした生活から、日々「戦争の感触」を受け取っていた。

文芸評論家の斎藤美奈子は、戦争体験のない戦後世代にも区分が存在すると論じている（『ちくま』二〇二二年二月号）。親の戦争体験を一次情報として聞いた六〇年代生まれまでの世代と、学校教育とメディアを通して戦争しか知らない七〇年代以降生まれの世代である。この基準からすれば私は第一世代にあたる。

戦争体験者が少なくなり、体験者の祖父母・親を持つ世代が高齢化し、多くの人がメディアと学校教育でしか、先の戦争を知り得なくなっている。

世間では、八月に集中する戦争関連の報道を「八月ジャーナリズム」と揶揄することもある。だが今後、この時期の報道はますます重要になる。またそれは「実相」に基づいたことがなりよりも必要である。

だが、例えば削除されてしまった「はだしのゲン」の鯉泥棒のシーンから「泥棒せざるを得ない」という日常の切迫感の「感触」を伝えていくことも、途絶えさせてはいけないう切に思っている。

（静岡文化芸術大学教授）

2023年8月13日

中日新聞（朝刊）p.5